

2018年度 教育奨励基金 学習・研究成果報告書

最後まで自分らしさをデザインする  
～End of Life Planning サポートシステムの構築～

看護医療政策学生会(SAPnmc)

田村冴香

島田宗太郎

平川慶香

山本桃子

## **1. 目的**

現在、超高齢社会であると同時に、多死社会であると言われている日本。2030年には年間死亡者数は160万人を超えると予測され、終末期を過ごす在宅ケアや施設等の不足により看取り難民や孤独死の増加が危惧されており、ひとり一人が自分らしい人生の歩みや死の在り方を考え、最期の場所を選択する End of Life Planning の重要性が高まっている。

そこで、本研究では、若い世代、特に大学生に向けた死の準備教育の実施や Advance Care Planning (以下、ACP) の認知度を高める方策を検討した。

## **2. 調査方法**

研究目的を達成するため以下の1)～4)の調査および検討を行った。

- 1) End of Life 教育、ソーシャルキャピタル(以下、SC)、ACP についての文献調査
- 2) End of Life の教育・SC・ACP の推進者・団体へのインタビュー調査
- 3) 大学生を対象とした End of Life Planning に関する Web を介したアンケート調査
- 4) End of Life Planning の方策の考案および評価

## **3. 結果**

### **1) End of Life 教育、SC、ACP についての文献調査結果**

文献検討の結果、以下のことが分かった。

- ①End of Life の教育の重要性・必要性は明らかだが、否定的な捉え方も少なくなく、学校教育の中でまだ普及していない。
- ②高齢者は生活している地域が重要である。SC の活用により身体機能の低下予防やうつ状態の予防など、引きこもりによる孤独・孤立を早期に発見し対応することが期待されている。
- ③ACP は闘病している人や終末期の人だけでなく、健康時から取り組むことでより効果を発揮する。

### **2) End of Life の教育・SC・ACP の推進者・団体へのインタビュー調査結果**

#### **①End of Life 教育の実践者**

デス・エデュケーションは、死への価値観を育むきっかけになり、自分で選択する力も成長させ得ることがわかった。

#### **②SC の活用 (対象：西東京市地域サポート「りんく」)**

高齢者の孤独予防として SC を生かすためには、地域に住む高齢者一人ひとりの『個のニーズ』を把握し、社会資源とマッチングしていくことが重要であることがわかった。

#### **③ACP (対象：一般社団法人 iACP)**

ACP は健康な時から継続して行うことで効果を最大限に発揮できることがわかった。

### **3) 大学生を対象とした End of Life Planning に関するアンケート調査結果**

全国の大学生 222 人から回答を得た。集計結果より、医療福祉系以外の学部では、End of Life の教育や ACP についての認知度が低かったが、そのような学部でも 72.6% の人が End of Life の教育について学ぶ必要があると回答した。

### **4) End of Life Planning の方策の考案および評価**

大学生向けの End of Life Planning サポートシステムを考案し、その妥当性を評価するために、ワークショ

ップを開催した。ワークショップ後のアンケートから、ACP の理解度や、End of Life に対する意識、必要性の理解の向上がみられた。また、『もしバナゲーム』やグループワークといった体験型学習が特に印象に残ったとの意見が多くみられた。

#### 4. 考察

1) デス・エデュケーションは、死生観を育むきっかけになり、自分にとって核となるものを見極める力も成長させ得ることから、「個の確立」を促すと考えられる。したがって、より多くの児童・生徒・学生がデス・エデュケーションに取り組めるように学校教育の場で広めていくことが望まれる。

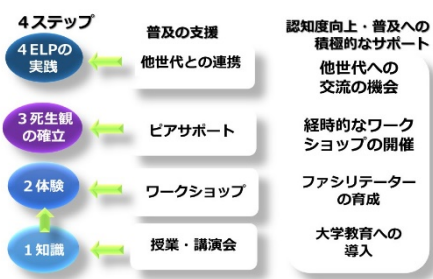
2) 生活している地域が主要なコミュニティとなっていることから、高齢者の孤独予防にソーシャルキャピタルを活用することは現実的で、かつ、効果は高いと推察された。

3) Web アンケート調査の結果より、若者世代は End of Life に対する関心は高いが、現在は健康であるために自分自身もいつかは死ぬという実感がなく、特別な機会がない限りわざわざ自分の End of Life について考えるということはないようだ。若者世代に自身や親しい者の死について考察してもらい、また超高齢社会の課題に目を向けてもらうためには、デス・エデュケーションや ACP について学び考える機会を提供することが有用であると考えた。

#### 5. 結論

若い世代がデス・エデュケーションや ACP について学ぶ機会を設けることで、自らの死生観や、家族やコミュニティの人々が最後まで自分らしくあるためにはどうすれば良いかを考えることができることが分かった。

医療福祉系以外の学部においても、大学生が授業や講演会を通して『知識』を得る機会をつくることが重要である。また、認知を深めるためには、実際に『体験』しながら考えるワークショップが効果的である。



また、知識や体験を通して、自己の End of Life の価値を見出す、すなわち、『死生観の確立』がされ、最終的に、大学生が家族などの身近な人の End of Life Planning をサポートし、将来地域の高齢社会を支える立場となることが求められる。以上をふまえて、『知識』『体験』『死生観の確立』『実践力』の4段階からなる『End of Life Planning サポートシステム』を検討し、これを提案した。

#### 6. 研究成果公表

本研究は、ORF2018「湘南藤沢学会第14回研究発表大会(2018年11月23日)」にてポスター発表を行い、ポスター部門第3位を受賞した。会場では「この発表で ACP について初めて知った」「実際にもしバナゲームを体験でき、ACP について理解できた」という参加者からの声も多かった。今後も、『End of Life Planning』の普及に向けた情報発信や啓発活動を実施していきたい。